

## 妊婦が抱く虐待不安の発生機序の検討 —出産経験に着目して—

東京大学大学院教育学研究科 渡 邊 茉奈美

### The Factors Affecting Pregnant Mothers' Abuse Anxiety

Graduate school of Education, The University of Tokyo, WATANABE, Manami

#### 要 約

本研究の目的は、虐待不安を妊娠期に抱くことはあるのか、あるとすればその要因は何なのかということを明らかにすることであった。妊娠 4・5 か月中に質問紙調査を実施し（研究 1）、さらにその中で同意の得られた方のみを対象として妊娠 6・7 か月中に半構造化面接を実施した（研究 2）。研究 1 では、4 項目で虐待不安を抱く程度について検討した。その結果、項目によってばらつきはあるものの、少なからず虐待不安を抱く妊婦がいることが示され、そこには家庭外でのサポートが強く影響を及ぼすことが明らかとなった。研究 2 では、出産経験による違いを質的に検討し、妊婦の語る虐待不安は出産経験によってその背景が異なることが明らかとなった。具体的には、初産婦が「虐待の連鎖」に関する不安を、経産婦が「上の子に対して虐待（的）育児をしていること」に関する不安を語った。妊娠期からの育児支援が盛んになりつつある現代において、母子の関係性に関する不安である虐待不安にも着目し、各々の状況により適した支援を行っていく必要があることが示唆された。

**【キー・ワード】 育児不安, 虐待不安, 育児支援**

#### Abstract

The purpose of this study was to investigate following two questions about “abuse anxiety” which is complained by parenting mothers recently; (a) Do the mothers hold abuse anxiety even during pregnancy?, (b) What factors affect the abuse anxiety held in pregnancy? I surveyed question (a) by questionnaire during pregnant period of 4-5 months, and interviewed about question (b) during pregnant period of 6-7 months. The results from the survey showed that pregnant mothers held abuse anxiety more or less. The interview showed that primiparas held it because of their abused history by their parents while multiparas held it because they might have already done to their children. From these, it is quite different between primiparas and multiparas, but both of them need not to be ignored. So it is expected the support which focuses on abuse anxiety during pregnancy will be provided to both primiparas and multiparas.

**【Key words】 parenting stress, abuse anxiety, social support**

## 問 題

現在、日本では「子ども虐待」が増加傾向にあり、平成 25 年度の児童相談所における相談対応件数は 7 万件を超えた（厚生労働省第 10 次報告, 2014）。「子ども虐待」はメディア等でも頻繁に取り上げられ、社会全体が「子ども虐待」に敏感になっており、子ども虐待の一次予防として目標に掲げる「虐待の早期発見」を促進していると考えられている。しかし一方で、社会全体が「子ども虐待」に敏感になることにより、育児を行う母親にとっては監視されているかのような、育児のしにくい窮屈な環境になっているということも指摘されている（大澤, 2005）。こうして生じた現代の育児環境特有の不安が「虐待不安」である（Choi, Yamashita, Wada, Narumoto, Nanri, Fujimori, Yamamoto, Nishizawa, Masaki, and Fukui, 2003）。「虐待不安」とは、「育児不安」の下位概念であり、「育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態」と定義される（庄司, 2003）。具体的には、「自分も虐待しているのではないか」、「自分も虐待してしまうのではないか」、「自分も虐待していると思われるのではないか」といった不安を含む（渡邊, 印刷中）。「虐待不安」に関する研究はまだ緒に就いたばかりであると言えるが、それは後の不適切な養育を正にも負にも予測し得る両刃性があることや（庄司, 2003）、母親の育児効力感や虐待傾向とネガティブな関連があることが示唆されているため（渡邊, 印刷中）、虐待予防という文脈では括目に値する。さらに虐待不安は、母親の年齢や学歴、収入など、いわゆる「虐待のリスク因子」にかかわらず存在する（田中, 2010）。従って、虐待不安に着目することにより、これまで虐待予防のため用いられてきたリスクスクリーニング等では掘りきれなかった母親を明るみにし、「実は支援を必要としていたが見過ごされてきた母親」に対してもより適切な支援が可能となると考える。

このような状況の中で妊娠期からの支援の重要性が周知のものとなっている。妊娠期は、身体的にはもちろんのこと、心理的にも大きな変化を示し、重要で困難な時期である（Pajulo, Helenius, and Mayes, 2006）。特に胎動が始まると、お腹の子どもについてのイメージが急激に発達し、妊娠中期から妊娠後期にかけてその表象が明確に現れ始める（Stanton, 1990; Ammanti, Baumgartner, Candelori, Perucchini, Pola, Tambelli, and Zampino, 1992）。お腹の子どもについての表象は、世帯中に 7 歳未満の子どもが多くいる場合と現在の妊娠が計画されていなかった場合にネガティブなものとなる（Pajulo, Helenius, and Mayes, 2006）。そしてこのように妊娠期に現れた表象は、妊娠期と産後とで大きな変化を見せない安定したものであるとされている（Benoit, Parker, and Zeanah, 1997; Theran, Levendosky, Bgat, and Huth-Bocks, 2005）。Theran ら（2005）はその中でも妊娠期と産後とで表象に変化を見せた母親に着目した。妊娠期と産後とで表象に変化を見せた母親は、産後の表象が不安定であっても妊娠期に安定した表象を抱いていた場合に、産後の母子の相互作用において敏感性の高さや喜び情動の高さを示すことが明らかとなった。これらの知見から、妊娠期は最も介入に適した時期であり、より早期からの臨床的支援が後の安定した親子関係の形成を支えるうえでも非常に有効なものとなりうるということが示唆されている（本島, 2007）。

特に本研究では妊婦の出産経験の有無に着目する。Pajulo ら（2006）が示したように、子どもの多

さがお腹の子どもに関する表象をネガティブに予測するのであれば、経産婦にも育児支援をする必要がある。しかし現在の日本においては妊娠期に実施される母親教室のような初産婦を対象とした支援ばかりに重きが置かれていることもまた事実である。確かに初産婦は、はじめての妊娠、出産に対し広く漠然とした不安を抱いており、母親教室という場はそのような初産婦にとって情報収集し安心することのできる、有用な場であると考えられる。ただ、経産婦もまた、有限な育児資源の中で新たな命を迎え育児の負担が増えることに関する不安など、質の異なる不安を多く抱くことが予想できる。従って本研究では妊婦の出産経験の有無にも着目することとする。

## 研究 1

### 目 的

新たに生じつつある不安である虐待不安に着目し、妊婦の抱く虐待不安の程度や虐待不安を抱く背景にある要因を把握する。そこで本研究では、質問紙調査を通して以下の 2 点を把握することを目的とする。

- ① 妊娠期において虐待不安を抱くことはあるのか。
- ② 妊娠期にも虐待不安を抱くことがあるとすれば、その要因は何なのか。

### 方 法

#### 対象

関東近郊の婦人科または産婦人科 7 院で、妊婦健診のため来院した妊婦 183 名を対象とし質問紙調査を実施した。平均妊娠週数は 16.57 週、平均年齢は 31.85 歳 (SD=4.50) であった。

#### 調査時期

2013 年 3 月から 2014 年 12 月に調査を実施した。

#### 手続き

上記の通り、関東近郊の婦人科または産婦人科 7 院で、妊婦健診のため来院した妊婦を対象に質問紙調査を実施した。具体的には、質問紙配布の協力を承諾の得られた 7 院に、約 10 ヶ月間質問紙を設置し、その間に妊婦健診のため来院した妊婦に対し妊娠 4-5 ヶ月中に回答し提出するよう伝えた上で配布するよう、各医院の医師または看護師に教示した。妊婦に対しては文書にて研究の目的等の説明を行った。質問紙の収集の際にはプライバシーの保護に配慮し、担当者である医師または看護師が質問紙の回答を見ることができないよう封筒に入れ、密封した状態で回収した。

## 質問紙

質問紙は、フェイスシート（年齢、妊娠週数、出産予定日、子どもの数、職業）と次の 5 種類の尺度から構成された。虐待不安に影響を及ぼす要因を検討するため、「虐待不安」に関する先行研究および「虐待不安」の上位概念と位置づけられる「育児不安」（庄司, 2003）に関する先行研究を参考に、それぞれの変数との関連を検討することとした。

*Prenatal Attachment Inventory*（辻野・塚原・飯野・市原・村上, 2004）：胎児に対する愛着の強さが虐待不安の低さと関連することが想定される。この尺度は全部で 21 項目あり、得点の高さが愛着の強さを示す。

*虐待可能性不安*（虐待不安尺度；渡邊, 印刷中）：本研究では妊婦を対象としており、まだ育児が始まっていない状況であるため、虐待不安尺度のうち、今後の育児についての不安に該当する虐待可能性不安項目のみを使用した。これらは全部で 4 項目あり、得点の高さが虐待不安の高さを示す。本調査における信頼性係数は  $\alpha=.88$  だった。

*育児ソーシャル・サポート尺度*（手島・原口, 2003）：ソーシャル・サポートの得られやすさが育児不安の低さと関連することが多くの研究で指摘されており（Arimoto and Murashima, 2007; 岡本, 2003）、特に虐待の文脈においてはサポート資源の豊富さがその不安を低減させ、良質な育児を導くことは容易に予測できる。育児ソーシャル・サポート尺度は 21 項目から成り、得点の高さがソーシャル・サポートの豊富さを示す。下位尺度としては第 I 因子に精神的サポート、第 II 因子に育児ヘルプ、第 III 因子に居場所づくりが含まれる。本調査におけるそれぞれの信頼性係数は、第 I 因子が  $\alpha=.72$ 、第 II 因子が  $\alpha=.74$ 、第 III 因子が  $\alpha=.81$  だった。

*被養育経験項目*（潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度；花田・本田・小野, 2006）：被養育経験の良質さが育児不安の低さと関連することが指摘されており（Arimoto and Murashima, 2007）、虐待不安についても同様のことが言えると考えられる。被養育経験項目は 10 項目から成り、得点の高さが被養育経験の良質さを示す。本調査における信頼性係数は  $\alpha=.92$  だった。

*特性不安 (STAI)*（肥田野・福原・岩脇・曾我・Spielberger, 2000）：特性不安は、状態不安である虐待不安と強く関連があることが想定される。特性不安項目は 20 項目から成り、得点の高さが特性不安の高さを示す。本調査における信頼性係数は  $\alpha=.90$  だった。

統計的手続きには IBM SPSS Statistics 19 を用いた。

## 倫理的配慮

研究に関する全ての文書は、東京大学倫理専門委員の承認を得ている。

## 結 果

対象者の出産経験は、初産が 62.3%、2 人目が 32.8%、3 人目が 3.8%、4 人目が 1.1%であった。

### 妊娠期の虐待不安の程度

妊娠期に抱く虐待不安の程度を把握するため、本調査で使用した虐待可能性不安の4項目それぞれについて、「3. あてはまる」もしくは「4. 非常にあてはまる」を選択した妊婦の割合を算出した。その結果、表 1-1 の通りであった。最も多くの妊婦が3点または4点に付した項目で全体の26.8%、最も少ない妊婦が3点または4点を付した項目で6.6%と、項目によって回答に幅のある結果となった。

表 1-1 虐待不安を抱く妊婦の割合

項目	割合 (%)
1. いずれ自分も子どもにひどく暴力をふるってしまうのではないかと思う	6.6
2. 虐待のニュース等を見ると、明日は我が身かなと思う	13.6
3. 子どもに対してひどく手が出してしまったらどうしようと思う	26.8
4. 状況によっては、自分も虐待をするのではないかという危うさを感じる	22.4

### 妊婦の抱く虐待不安の要因

妊娠期に抱く虐待不安に影響を及ぼす要因を検討するため、虐待不安を従属変数とし、対象者の年齢、妊娠週数、出産経験、胎児への愛着、精神的サポート、育児ヘルプ、居場所づくり、被養育経験、特性不安を独立変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した（表 1-2）。その結果、虐待不安は、特性不安（ $\beta=0.287$ ,  $p<.01$ ）および育児ヘルプ（ $\beta=-0.253$ ,  $p<.01$ ）と有意に関連することが明らかとなった。VIFはいずれも1.128であり、多重共線性が起こる可能性は低いと判断された。

表 1-2 虐待不安に対する重回帰分析（ステップワイズ法）

	標準化偏回帰係数 ( $\beta$ )	P値	VIF
対象者の年齢	<small>注1</small>		
妊娠週数	-		
出産経験	-		
胎児への愛着	-		
精神的サポート	-		
育児ヘルプ	-0.253	0.001	1.128
居場所づくり	-		
被養育経験	-		
特性不安	0.287	0.002	1.128
調整済み	0.184	<.001	

注1：-はステップワイズ法によって、採択されなかった項目を表す。

## 考 察

### 妊婦の抱く虐待不安

妊婦はまだお腹の中にいる我が子に対し、どの程度虐待不安を抱いているのだろうか。本研究では表 1-1 に挙げた 4 つの虐待可能性不安に関わる項目を使用した。その結果、項目によってバラつきはあるものの、少なからず妊婦も虐待不安を抱いていることが明らかとなった。これら虐待不安の項目は、「虐待」や「暴力」といったインパクトの強いことばを用いており、社会的望ましさによる影響を受けることが考えられる。例えば、「自分が子どもに対して暴力をふるうかもしれないと思っていると知られたら、自分はダメな母親だと思われるかもしれない」というように考え、それらの項目には低めに得点をつけるということである。その中でも表 1-1 に示したような結果となったことは、妊娠期から虐待不安を抱く母親がいるということが十分にあり得ると言っても過言ではないだろう。特に「3. 子どもに対してひどく手が出てしまったらどうしようと思う」という項目には 26.8%もの妊婦が「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と回答した。この項目は他の項目と比べ、「虐待」や「暴力」といったインパクトが強いと思われることばを使用しておらず、社会的望ましさに影響されることなく素直に回答しやすかったのではなかろうか。また、「1. いずれ自分も子どもにひどく暴力をふるってしまうのではないかと思う」という項目には最も少なく、6.6%の妊婦が「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と回答した。この項目への反応の低さから、もしかすると妊婦たちの抱く「子ども虐待」の定義に違いがあるのかもしれないと考える。すなわち、他の項目では「虐待」、「ひどく手が出る」ということばを用いており、そのことばから想像する「子ども虐待」の程度というのは回答者に委ねられている。それに対し「暴力」ということばを用いると途端にその破壊力が増すイメージがある。例えば「手を出す」というと、軽く頭をポンと叩くことや、お尻をペチンと叩くことも含まれるだろう。それが「暴力」となると、これらの行動というよりは、拳で強く不当な乱暴をふるうことを想像する。こうして、この「暴力」ということばを用いた項目である「1. いずれ自分も子どもにひどく暴力をふるってしまうのではないかと思う」については特に「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と回答した妊婦が少なかったのではなかろうか。

以上のことから、妊娠期にも虐待不安を抱くことは多かれ少なかれあり得ると言え、その虐待不安は特に死につながり得るような“child abuse”というよりは、もう少しマイルドな“child maltreatment”に関する不安である可能性がある。ただし、本研究では特に「子ども虐待」の定義については明確に定めておらず、あくまでも回答者である妊婦の主観に委ねているため、これに関する議論や考察はこままでにとどめておくこととする。

### 妊娠期に抱く虐待不安の背景にある要因

では妊娠期に抱く虐待不安に影響を及ぼしていると考えられる要因は何だろうか。先行研究を参考に、関連があると予測される 9 つの変数を独立変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果、特性不安と、育児ソーシャル・サポートのサブカテゴリーのひとつである育児ヘルプのみが虐待可能性不安に影響を及ぼしているということがわかった。先述のように、出産経験につい

ては、経産婦の方が虐待不安を高く抱くことを予測していたが、有意とはならなかった。実際には、初産婦も経産婦も同等の虐待不安を抱いていたということである。ただ、本研究では、初産婦と経産婦それぞれについて、虐待不安を抱くメカニズムにまでは踏み込むことが出来ない。両者が同等の虐待不安を抱いていたとしても、その背後にある要因は異なっている可能性がある。具体的には先述のように、経産婦の場合には上の子の育児の経験から、育児は楽しいことばかりではなく、大変なこともあるということを経験し、それによって自分のネガティブな感情のコントロールを難しいと感じているのかもしれない。それに対し初産婦は、経験等に裏付けされておらず、それこそメディア等を通して抱くようになった、もっと漠然とした虐待不安である可能性がある。このメカニズムについて今後はより詳細に検討する必要があるだろう。

また、育児ソーシャル・サポートについては、サブカテゴリーのいずれについても、高いほど虐待不安が低くなると仮定していたが、そのひとつである育児ヘルプのみが虐待不安を予測する結果となった。よって、それぞれのサブカテゴリーについて詳細に検討する。虐待不安とは有意な関連が見られなかった精神的サポートは、家庭内でのサポート、主に夫からのサポートの有無を問う項目となっている。これらの項目について、虐待不安においては関連がないということは、家庭内（主に夫から）のサポートに関しては、良くも悪くも期待しておらず、影響を受けにくい可能性が示唆された。また、やはり虐待不安と有意な関連が見られなかった居場所づくりは、子育ての中で生じてくる必要性に応じた環境が整っているかどうかを問う項目となっている。これらについては妊娠期、特に初産の妊婦にはまだ該当しない項目が多かった可能性が考えられる。これらに対し虐待不安と有意な関連の見られた育児ヘルプは、家庭外での頼れる人が具体的に思い浮かんでいるかどうか、つまり、すでに頼れる人として認識している人がいるかどうかということを問う内容となっている。これらの項目は、家庭内に限らない（夫以外の）サポートに関するものであると言える。このように夫以外からのサポートが虐待不安に影響を及ぼすということは、もし例えば夫が仕事等で忙しく育児に協力できないような家庭の場合にも、それ以外のサポートを豊富に整えることさえ出来れば、虐待不安を低減させることが可能となることを示唆する。もちろん、虐待不安を低減することが必ずしも「善い」ことかどうかはわからないが、本研究では虐待不安の高低による帰結までは踏み込むことが出来ないため、今後の研究でそれを明らかにすることとする。

表 1-2 から、虐待不安と有意な関連の見られた変数として、特性不安も挙げられる。虐待不安とは先述の定義にもあるように、「育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態」、すなわち状態不安であると言える。従って、特性不安との関連が強く見られるということは当然の結果であろう。

## 研究 2

### 目的

研究 1 を踏まえ、本研究では、妊婦の抱く虐待不安の要因を質的に検証する。

特に出産経験による違いについては、研究 1 からはその影響を明らかにすることができなかった。しかし質的な検討を行うことにより、出産経験を含めて数値からは明らかにできなかった虐待不安の背景を探る。

## 方 法

### 研究参加者

研究 1 の質問紙において面接調査に同意の得られた 45 名（平均年齢 32.25 歳，SD=4.38，面接時の平均妊娠週数 24.05 週）の妊婦を対象とした。そのうち、初産婦は 28 名，経産婦は 17 名だった。

### 手続き

半構造化面接を実施した。面接においては、参加者自身の被養育経験，育児の理想と現実的な見通し，子ども像の理想と現実的な見通し，子育てをめぐる社会状況に関する考え，出産や産後の不安について質問をした。

### 分析方法

研究 1 で使用した虐待不安尺度において最低 1 項目に「3. あてまはる」または「4. 非常にあてまはる」に得点を付けた妊婦を虐待不安有群，それ以外の妊婦を虐待不安無群とした。さらに先述のように初産婦と経産婦の語る不安には質の違いがあると予測されるため，虐待不安の有無 (2) ×初産婦/経産婦 (2) の 4 群に群分けをした。その上で，質的コード化 (Coffey and Atkinson, 1996) の手法を用いることとし，その手法を用いている山根 (2012) の研究を参考にした。その手順は出産や産後の不安についての質問に対する語りの内容および特徴に沿ってデータを区分し，そこに適宜ラベルを与えコード化する。続いて，それらのラベルについて繰り返しデータ間の比較を行い，各々の語りの類似性と差異から，個々のラベルを整理，統合するカテゴリーを生成した。そのカテゴリーは，先述のように，初産婦の場合には妊娠・出産の不安を多く語り，経産婦の場合には育児の不安を多く語ると予測しているため，①出産までの自分の体調や家庭などに関する「産前の不安」，②産後の育児や家庭，仕事などに関する「産後の不安」，そして本研究で特に着目する③自分が子どもに対して虐待をしてしまうのではないかという「虐待不安」の 3 つの分類カテゴリーを抽出した。これらの分類カテゴリーに基づき，群ごとにその不安の傾向を捉え，特に「虐待不安」に関しては特徴的な語りをした妊婦について詳細に検討を加えた。

### 倫理的配慮

本研究に関わるすべての文書は事前に東京大学倫理専門委員の承認を得ている。参加者には調査開始前に研究の調査内容および調査協力の任意性について十分に説明を行い，同意を得たうえで調査を実施した。

## 結果と考察

虐待不安尺度各項目について「3. あてまはる」または「4. 非常にあてまはる」に得点を付けた人数は次の通りであった：「いずれ自分も子どもにひどく暴力をふるってしまうのではないかと思う」4名、「虐待のニュース等を見ると、明日は我が身かなと思う」9名、「子どもに対してひどく手が出ってしまったらどうしようと思う」14名、「状況によっては、自分も虐待をするのではないかという危うさを感じる」15名。これに従って、このうち1項目でも「3. あてまはる」または「4. 非常にあてまはる」に得点を付けた人を虐待不安有群、それ以外を虐待不安無群とした。

虐待不安無群に属する妊婦は合計26名（平均年齢=31.98歳，レンジ=26-40歳），そのうち初産婦は18名，経産婦は8名だった。

虐待不安有群に属する妊婦は合計19名（平均年齢=31.84歳，レンジ=24-42歳），そのうち初産婦は10名，経産婦は9名だった。

### 虐待不安無群の妊婦が語った不安

虐待不安無群の妊婦の不安の各カテゴリーに分類された語りを表2-1に示した。

虐待不安無群×初産婦というのは、主として抱く不安は身体的なことに關するものであったのに対し、虐待不安無群×経産婦の語る不安は、上の子と関連付けられた不安が大部分を占めており、経産婦は上の子の育児の忙しさからお腹の子どもについて考える余裕がないと推察される。

また、表中にないものとして、虐待不安無群においては、3名がそもそもの不安のなさを語った。この3名はいずれも初産婦で会社員，夫と二人暮らしであった。3名とも出産について“前向きですかね”と述べ，その妊娠が望んだ妊娠であったことを示唆した。ただ一方でこの時期にはまだ仕事をしており，その忙しさから出産や育児について考える余裕がないことも語っており，今後産休に入ってから不安等を強く抱くようになる可能性も否めない。従って，この時期に不安のなさを語る母親を「サポート不必要群」として楽観視するのではなく，継続的な不安の聴取，必要に応じた支援を提供していくことが求められるだろう。

表 2-1 虐待不安無群の妊婦の語る不安

初産婦/経産婦	カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
初産婦	産前の不安	母子の健康についての不安	“一番不安なのは子どもが健康で産まれてきてってということ” (24)
		出産時の状況についての不安	“どのタイミングで陣痛が始まるんだろう。会社でなかったらどうしよう。っていう不安。どれくらい痛みなのか” (111)
	産後の不安	漠然とした不安	“どんな感じなのか” (24)
		母子の健康についての不安	“若い人と違って身体がちやんと戻る、体力とかが戻るのかどうか” (182)
		仕事復帰への不安	“仕事と育児の両立ができるのかな” (146)
		漠然とした不安	“育てることの方がさらにもっと漠然とした不安” (53)
その他	“子どもが産まれたことによって夫婦関係がちょっと悪くなっちゃったらいやだ” (120)		
経産婦	産前の不安	出産時の上の子の面倒についての不安	“自分がいらない一週間の間の家の中がどうなるんだろう” (119)
	産後の不安	産後の上の子の変化についての不安	“上の子がどういう反応するかわかんない” (145)
		2人以上の育児についての不安	“2人になったときにどうなるのかなっていうのはある” (179)
		母子の健康についての不安	“産んだ後の体力低下ってというのがどれほどのものか” (7)
		仕事復帰への不安	“やっぱり仕事始まってからかな、大変かなって思います” (145)
	漠然とした不安	“どうなるのかな” (179)	

( ) 内は対象者のID番号を示す

### 虐待不安有群の妊婦が語った不安

虐待不安有群の妊婦の不安の各カテゴリーに分類された語りを表 2-2 に示した。

虐待不安有群×初産婦というのは、主として抱く不安は虐待不安無群×初産婦と同様に身体的なことに関するものであった。その中でも【虐待不安】は広く語られた。特に7名の『虐待(可能性)不安』は、妊婦から語られた“子どもを殺しそうで怖い”といった過激なものから“絶対自分が(虐待を)やらないかって言われるとわかんない”といった比較的マイルドなものまで広く捉えており、その不安の程度によって、妊婦にはどれほどの負担となっているのか、検討する必要があるだろう。さらにこの群においては3名が『連鎖不安』を語った。具体的には、自身の被養育経験を振り返り、自分の

受けてきた育児やしつけが「虐待」にあてはまるとすれば自分もそれを繰り返すことを不安だと語ったのだ。このように、初産婦の中でも特に虐待不安の高かった妊婦というのは、その背景に自身で不適切だと感じるような被養育経験の記憶があると考えられる。さらにその上で3名に共通して言えることとして、メディア等を通して「虐待の連鎖」(Belsky, 1978; Kaufman and Zigler, 1987 など)についての知識が少なからずあったということがある。この虐待の連鎖率、つまり、被虐待経験のある人が親になった時に虐待をする確率は  $30\pm 5\%$ とされており、この数字を大きいと見るか小さいと見るか議論の分かれるところである。しかしメディア等では「大きい」と見なされてキャッチーに扱われることが多いというのが現状であり、当事者にとっては、脅威的な情報であると言える。従って、こういった情報を過剰に煽るのではなく、適切に社会に伝えることもまた、親となりゆく人の不安を低減することへとつながるのではなかろうか。

それに対し虐待不安有群×経産婦の語る不安はやはり、上の子と関連付けられた不安が大部分を占めていた。この傾向は【虐待不安】についても言え、『上の子との関係の中での不安』と『上の子の育児についての不安』がそれにあたる。『上の子との関係の中での不安』とは、上の子に対しすでに自分が虐待に近い行為をしてしまっていると自分の育児について評価した上で、そこにお腹の子どもの育児負担が加わることによりさらに過度な不適切養育をしてしまうことを危惧する不安である。従ってこの種の不安には、すでに行っている自分の育児への自信のなさが強く影響を及ぼしていると考えられる。また、『上の子の育児についての不安』とは、もはやお腹の子どもについての考えが及ばず、目の前にいる上の子に対し、自分が虐待をしているかもしれない、または、周りからは虐待をしていると思われるかもしれないと危惧している状況である。この種の不安を語る過程ではお腹の子どもに関する育児には考えも及んでおらず、現在の育児ですでに精神的な余裕がなくなっていると言っても過言ではなかろう。このように、経産婦の語る【虐待不安】の多くには上の子どもの育児を通して経験してきたネガティブな感情などが含まれている。【虐待不安】の抽出により、経産婦の抱える育児についての苦悩を垣間見ることができた。

表 2-2 虐待不安有群の妊婦の語る不安

初産婦/経産婦	カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
初産婦	産前の不安	母子の健康についての不安	“ちゃんと健康に産まれてくるかっていうのがやっぱり一番不安” (37)
		出産時の状況についての不安	“ほんとに大丈夫なのかなとか、やっぱり痛いのは嫌なので” (115)
	産後の不安	母子の健康についての不安	“産まれてしばらくはあんまり寝られないとかそういうので結構イライライライしたりしてしまったり、ちょっと精神的に落ち込んだりっていうのがあるかもしれないっていうのがちょっと不安” (41)
		その他	“教育費はちょっと気になる” (115)
虐待不安	連鎖不安	“親にこういう風に言われて叩かれたから自分も叩いちゃうのかなっていう不安” (113)	
	虐待（可能性）不安	“子どもを殺しそうで怖い” (183)	
経産婦	産前の不安	出産時の上の子の面倒についての不安	“主人が夜いない日とかになんか（陣痛など）あると、子どもをどうしようかな” (62)
		母子の健康についての不安	“体力的に大丈夫かな” (20)
	産後の不安	2人以上の育児についての不安	“2人をちゃんとできるのかな” (149)
		母子の健康についての不安	“今回はすごくその不安（障害があるかどうか）がつきまとう” (11)
	虐待不安	その他	“お給料が減るので、そこでやりくりできるかな” (130)
		虐待（可能性）不安	“放棄しちゃうんじゃないかっていう不安はないわけではない” (147)
		上の子との関係の中の不安	“自分もいつかやるんじゃないか、これがそれにあたるのか” (72)
		上の子の育児についての不安	“ちょっと泣かしていると虐待してるんじゃないかとか” (149)

( ) 内は対象者のID番号を示す

## 総合考察

研究 1 から、妊娠期にも虐待不安を抱く母親がおり、その背景のひとつとして家庭外のソーシャル・サポートの豊富さが強く影響を及ぼしていることが明らかとなった。夫の育児や家事への協力をはじめとした家庭内のサポートは介入が難しく、家庭外のサポートを豊富にすることによって母親の不安を低減することができる可能性が示唆されたことは、育児支援の現場にとっても有効な知見であったと言える。確かに、いわゆるハイリスク家庭で最も支援を必要とすべき母親が援助要請できていないという事実もあり、彼女らをどのように支援していくかという問題はある。しかし、少なくとも援助要請のできる母親については、「夫が協力しないからどうにもできない」と諦めるのではなく、支援をすればするほど、救うことができる可能性が高まる。では、どのように支援をすれば良いのだろうか。そのヒントとして、研究 2 から、出産経験に着目した支援の重要性が明確になった。現在の日本で実施されている妊娠期の支援においては初産婦に比重が置かれがちだが、初産婦も経産婦も共に虐待不安を抱いており、その質に大きな違いがある。従って、例えば初産婦にはその被養育経験も視野に入れた支援、経産婦には上の子との関係も含めた支援というように、初産婦、経産婦それぞれに対し、各々の状況に即した支援というのが必要であろう。

今後は、この妊娠期に抱かれた虐待不安が、実際に子どもと接しどのように変容していくのか、そして養育行動にはどのような影響を及ぼすのかということを縦断的に検討し、育児支援の現場により具体的な提案をすることが期待される。

## 引用文献

- Ammanti, M., Baumgartner, E., Candelori, C., Perucchini, P., Pola, M., Tambelli, R., & Zampino, F. (1992). Representations and narratives during pregnancy. *Infant Mental Health Journal*, 13(2), 167-182.
- Arimoto, A. & Murashima, S. (2007). Child-rearing Anxiety and Its Correlates Among Japanese Mothers Screened at 18-Month Infant Health Checkups. *Public Health Nursing*, 24(2), 101-110.
- Belsky, J. (1978). Three theoretical models of child abuse: A critical review. *Child Abuse & Neglect*, 2, 37-49.
- Benoit, D., Parker, K. C. H., & Zeanah, C. H. (1997). Mothers' representations of their infants assessed prenatally: Stability and association with infants' attachment classifications. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 38(3), 307-313.
- Choi, H., Yamashita, T., Wada, Y., Narumoto, J., Nanri, H., Fujimori, A., Yamamoto, H., Nishizawa, S., Masaki, D., & Fukui, K. (2010). Factors associated with postpartum depression and abusive behavior in mothers with infants. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 64, 120-127.
- Coffey, A. & Atkinson, P. (1996). *Making sense of qualitative data: Complementary research strategies*. Thousand Oaks: Sage Publications.

- 花田裕子・本田純久・小野ミツ (2006). 潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度作成についての検討 子どもの虐待とネグレクト, 8(2), 247-257.
- 肥田野直・福原眞知子・岩脇三良・曾我祥子・Spielberger, C. D. (2000). 新版 STAI マニュアル 実教出版: 東京
- Kaufman, J. & Zigler, E. (1987). Do abused children become abusive parent? *American Journal of Orthopsychiatry*, 57(2), 186-193.
- 厚生労働省 (2014). 児童相談所での児童虐待相談対応件数 厚生労働省 2014 年 8 月 4 日 <<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000053235.pdf>> (2014 年 9 月 25 日)
- 本島優子 (2007). 妊娠期における母親の子ども表象とその発達の規定因及び帰結に関する文献展望 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 299-312.
- 岡本絹子 (2003). 親子クラブに属する母親の育児状況と育児不安 川崎医療福祉学会誌, 13(2), 325-332.
- 大澤朋子 (2005). 今日の児童虐待対策の矛盾—「虐待不安」拡大の視点から— 社会福祉, 46, 67-80.
- Pajulo, M., Helenius, H., & Mayes, L. (2006). Prenatal views of baby and parenthood: Association with sociodemographic and pregnancy factors. *Infant Mental Health Journal*, 27(3), 229-250.
- 庄司一子 (2003). 子育て中の母親が抱く虐待不安 日本教育心理学会総会発表論文集, 45, 737.
- 相馬深輝 (2011). 初妊婦の胎児への愛着と生活行動との関連 日本助産学会誌, 25(2), 201-214.
- Stanton, M. C., (1990). Parents' awareness of their unborn infant in the third trimester. *Birth*, 17(2), 92-96.
- 田中千穂子 (2010). 「虐待不安」から見えるもの 都市問題, 101(2), 84-91.
- 手島聖子・原口雅浩 (2003). 乳幼児健康診査を通した育児支援: 育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要, 1, 15-27.
- Theran, S. A., Levendosky, A. A., Bogat, A., & Huth-Bocks, A. C. (2005). Stability and change in mothers' internal representations of their infants over time. *Attachment & Human Development*, 7(3), 253-268.
- 辻野久美子・塚原正人・飯野英親・市原清志・村上京子 (2004). 児童虐待に対する短大・大学生の意識 小児保健研究, 63(6), 701-707.
- 渡邊茉奈美 (印刷中). 「虐待不安」の構造—虐待不安尺度作成の試み— 子育て研究.
- 山根隆宏 (2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ: 人生への意味づけと障害の捉え方との関連 発達心理学研究, 23(2), 145-157.

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた妊婦の皆様に深く感謝申し上げます。また、質問紙の配

布等でお世話になりました，白山レディースクリニック，かみやレディースクリニック，小平記念東京日立病院，中野レディースクリニック，ヤマダレディースクリニック，矢内原医院，レディースクリニック大井産婦人科の院長先生およびスタッフの皆様にも，この場を借りて深く御礼を申し上げます。最後になりましたが，研究助成をいただきました「公益財団法人 発達科学研究教育センター」に対しまして，心より御礼を申し上げます。

